
物語を街角で配る女の物語

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語を街角で配る女の物語

【Zマーク】

N2227C

【作者名】

茶山ひよ

【あらすじ】

ある女が街角で自分が書いた物語を配っていた。「面白い」「続きを読みたい」と言われることが、女のたつたひとつ生きがいになっていた。

()

ハイクションです。

ある街でのことです。

毎日、街角に立つて、自分の作った物語を配つていてる女がいました。物語はビラ一枚にびっしりと書かれていて、最初はみんなそれを無視しました。

女は、自分があまり物語が上手くないことをわかつていて、出版社に持つていっても本になどなるはずがないことをわかつていました。

だけど、もしかしたら喜んでくれる人がいるかも知れない。

そう思つて書いたのです。

女の物語は、うまくなかつたので最初はみんな受け取らうとせませんでした。

初日は、たつた一人の男だけが「おもしろいね」とつてくれました。

女はその男だけのために、続きを書くことにしました。

男は毎日、女から物語を受けとり、読んでくれました。

そうやつて毎日配つていくるうちに、だんだん「面白いね」「続きが

「気になる」といってくれる人が増え、1年ののちには1000人の人が女の物語を待ちにしてくれるようになりました。

ところで女は、食べるために別の仕事を持っていました。

安い給料で一日中働かないと食べていけない仕事でした。

休みも普通の人の半分もありません。

その仕事だけで毎日、女は、くたくたでした。

だけど、楽しみにしてくれる人がいる、というその情熱だけで、寝る時間を減らして物語の続きを書きました。

すでに、女は倒れる寸前でした。

そんなある日のことです。

K・K・Kのよくな覆面の人たちが群がってきて

「面白くない」「なんだこの紙は」「レイアウトが読みにくい」

と物語を受け取るなり、女を罵倒し始めました。

女はショックを受けて、寝込んでしまいました。

すると、女の物語を楽しみにしているたくさん的人が、女のもとに励ましお便りをくれたのです。

女はそれを見て泣きました。

そしてなんとか立ち直ることができたのです。

でも体力の限界を感じた女は、毎日ではなく一日おきに街に立つようになりました。

それでも女の物語は、タダといつのもあり、飛ぶようにもらわれていきました。

そんなに喜んでもらえるなら、と女はまたできるだけ毎日物語を配るよう努力しました。

たくさんの人々に喜んでもらえる……それだけが女の原動力でした。

やがて長い長い物語も、いよいよクラスマックスにさしかかりました。

大事な場面ですから、女が物語を書く時間は3倍になり、もとより少なかつた寝る時間はほとんどなくなってしまいました。

しかも女の本職のほうもちよつと忙しくなっていました。

女は再び倒れる寸前になり、それを「皆が続きを待っている」それだけで持ちこたえていました。

そんなある日、いつも楽しみにしている街の人々

「ちょっとここに書かれた主人公ってサイテー」

「呆れちゃった」

「私もサイマーだと思ひ」

とくちゅぐちにいました。その日はたまたま主人公が少し悪いことをしてしまった場面でした。

女は、「次の話を読めば、少しあはわかってくれるかな」と思いました。

「すいません」と謝りました。

だけど次の日。

「次の話を読んだけど、单なるいいわけだよね」

と言われて、こんどこそ女はショックを受けました。

普通の状態だつたら「そう思う人もいてしかたがない」と思うところでしたが、女はなにしろ倒れる寸前を無理して書いていたものですから、そのショックはひどいものでした。

ショックを受けた女は、

「じゃあ続きは自分で書いてください」

と叫ぶと伸び筆を置いてしまいました。

でも、仕事のほうは休んだら、おかねがもいらなくなります。

おかねがもらえないところとは死ぬところですから、女は倒

れそうになりながらも仕事はつづけました。

そんな女のもとに、また街の人からたくさんのお手紙が届きました。

その大半は、励ましの内容でしたが、一度目のお休みといふこともあって、

「なんてわがままなんだ」

「责任感がない」

とこう叱りつける内容もありました。

なかには、街角に立つて

「この人は、前にもこんなことをしています。信じちゃいけません」

と女の目の前で怒鳴る人もいました。

女はもつともだと思いながらも、悲しいと思いました。

あの物語を書くのに、どれだけ女が苦労していたのか。

苦しい貧しい生活の中で、女がどれだけせいいっぱい頑張っていたのか。

女がつらくてたまらなかつたこと。誰も頼れなかつたこと。

わかるはずもないけれど。

ほひほひになつた女の心に、その罵倒の言葉は刺さりました。

怒られるたびに、自分は最低の人間だと思つてゐになつ、

続きを書く氣はどんどん失せていきました。

その「ひ」……女はもつなにもかも嫌になつてしまつました。

生きている値打もないほど、自分がちっぽけな人間に見えてしまつたのです。

物語を書いて街角で配つて褒められることだけが、若くもなく、お金もなく、お嫁にもいけなく、子供ももたない女のたつたひとつ生きる喜びだつた。

だけど、その物語が、今度はこんな苦しみを生むのなら。

女は、立ち上がりました。

それまで書きためた物語がそこにはありました。

女はそれを空地に持ち出すと、火を付けました。

女のたつたひとつの生きがいはどんどん灰になつていきました。

燃え尽きていく紙の束を見ながら、女はもう生きている意味もないと思いました。

「みんなさよなら」

つぶやくと女は油をかぶりました。そして小説を燃やしきべやうとしている火の中に飛び込みました。

自分に火が燃え移る一瞬前、女は思いました。

もし、自分が強かつたなら。

仕事と物語で寝れないくらいでへとへとにならないうらい強かつたら。

もしくは、どんなにひどいことを言われても刺さらない鉄のハートを持つていたら。

こんなことにはならなかつただろう。

でも、弱かつたのも自分自身なのだから。

弱くてすぐ人の言葉に傷つく自分だから、小説がかけたのかもしれないし。

いずれこうなる運命だつたのだ。

そう納得したとき、火は勢いよく燃え移りました。

(後書き)

代償行為として30分で書いて吐き出しました。
吐き出したこと、少し気持ちがおさまりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2227c/>

物語を街角で配る女の物語

2010年10月8日22時22分発行